

一つの地球に生きるわたしたち
～カンボジアってどんな国？～

上田 貴清

横浜市立本牧南小学校

◆実践教科：生活・道徳・国語・音楽 ◆時間数：10時間 ◆対象学年：小学2年生 ◆対象人数：26名

指導案

(1) 実践の目的：

- ①世界の国々との出会いを通して、自国日本、そして日本に住む外国の人々にも目を向け、開発途上国の理解を深めるきっかけにする。
- ②カンボジアを通して開発途上国の現状を捉えることで、日本との関わりや国際協力の大切さに気づく。
- ③開発途上国への理解を深めたことで、現状の自分たちの生活を見直し、国際社会の中で日本に住む自分たちに今できることは何かを考えさせる。

(2) 授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	「世界一周に出発だ！ ～世界のお金にふれてみよう～」 ねらい：世界と出会うきっかけとして世界のお金にふれ、各国の文化の違いを知り、世界への興味・関心をもつきっかけとする。	①世界の国々のお金を見比べ、文字や絵、形、厚みなどの様々な点を比較する。 ②お金にはその国の偉い人や大事にしているものなど、文化や人々の思いが表れていることなどを考える。	①世界の国のお金 (タイ・ベトナム・カンボジア・インド・エジプト・中国・アメリカ・トルコ・台湾・スリランカ・香港・・・など)
2	「世界の衣装を着てみよう」 ねらい：お金に続き、衣装を通して世界の文化の違いへの興味や関心を深める。	①各国の衣装の現物・写真を着てみせたり、飾ったりする。 ②世界地図をもとに、気候や文化など衣装にもいろいろな思いが込められていることを知る。	①世界地図 ②世界の国々の写真 ③世界の衣装 (インドネシア・スリランカ・中国・ベトナム・・・など)
3	「カンボジアってどんな国？」 ねらい：カンボジアの概要を知り、世界からカンボジアへ焦点をしばり、興味・関心をもつ。	①地図でカンボジアの場所を探し、写真などを提示して、カンボジアの概要を知る。	①地図 ②カンボジアの写真 (食べ物・街並み・遺跡など)
4	「カンボジアの学校を探検しよう」 ねらい：①カンボジアの学校の様子を知り、自分たちの学校と比較する。 ②同じ年頃の子どもたちに注目し、自分たちとの共通点や相違点を考える。	①カンボジアの学校・子どもたちの様子を写真や映像で知る。 ②自分たちの学校の生活と比較する。 登校の様子・売店・制服・休み時間・時間割・給食・掃除など	①写真 ②ビデオ映像
5	「学校に通えないと、どんなことが困るの？」 ねらい：①異なる言語に親しみをもつ②日本に住む外国籍の子どもが親しみのない言語で学習・生活する	①クメール語の文字・簡単な挨拶 ②文字が読めない体験活動を行う。 ②教科書のコピーを用いて算数の問題に取り組む。	①国語・算数の教科書 ②コピーした計算問題 ③クメール語の絵本 ④クメール語で書かれたラベルのペットボトル3

	ことについて考える。		本
6	「カンボジアの子どもたちの遊びを体験しよう」 ねらい：実体験を通して、カンボジアの子どもたちを身近に感じる。	カンボジアの子どもたちの遊びを紹介し、実際にやってみる。	①ビデオ映像 ②遊び道具
7	「カンボジアの生活を覗いてみよう」 ねらい：カンボジアの暮らしを都市と地方の両面からとらえ、日本の暮らしと比較して見る。	①これまでの学習から抱いたカンボジアのイメージを話し合う。 ②写真や映像をもとに、カンボジアの暮らしを知る。	①写真 ②ビデオ映像 ③ペーパークラフト 「トンレサップ湖の水上家屋」
8 ・ 9	「世界の歌やダンスを楽しもう」 ねらい：カンボジアやフィリピンのダンスを実際に楽しんで踊る中で、その国の文化に親しむ。	①カンボジアの影絵や楽器・ダンスを映像や実物で知る。 ②ダンスや楽器を実際に踊ったり、演奏したりする。	①写真 ②ビデオ映像 ③楽器・影絵の道具 ④ダンス道具(竹の棒)
10	「世界の子どもたちに目を向けよう～今の自分たちにできること～」 ねらい：世界の子どもたちの現状を知り、カンボジアで活躍する日本人を見て、日本にいる自分たちにもできることがあることを考える。	①世界の子どもたちの現状を知る。 ②カンボジアで活躍する日本人のことを知る。 ③クラス目標の「やったあパワー」をもとに、カンボジアの友達のために自分たちにできることを考える。	①写真 ②映像 ③ワークシート ④世界地図(3種類)

授業の詳細

1 時限目 「世界一周に出発だ！～世界のお金にふれてみよう～」

子どもたちが世界に目を向ける導入・きっかけづくりとして、子どもたちの生活の中でも身近なものである、「お金」を扱った授業を行った。これまでに、私自身が旅行などで実際に行ったことがある国のお金を、グループごとに見たり触ったりし、気づいたことを話し合い、共有するという形式をとった。

具体物があることで、子どもたちの想像力が広がり、たくさんの発見や気づき生まれ、よい授業のスタートを切ることができた。お金を通して世界の国々と日本の共通点や相違点、そして似ている点があることを学級全体で掴むことができ、次時からはさらにいろいろな面から世界のことを探検しようという意気込みをもって締めくくった。



中国の硬貨



インドのお札

お金の扱いには注意しなくてはならないので、全てジップロックに入れるようにした。

担任の見ていない前でのみ、直接出して触れてよい約束を徹底した。

子どもたちの気付きや感想

- ・日本と違って、色がカラフルで綺麗なお札がいっぱいあった。
- ・世界のお金にも日本と同じように人の顔が印刷されている。
- ・日本のお札には富士山の写真がうつっているから、お金にはその国の有名なものや偉い人が印刷されているのかもしれない。
- ・世界にはいろいろな文字があることが分かった。
- ・その国の文字の他に、わたしたちが読める数字も書いてあるのは、他の国の人がお金を使う時に分かるためだと思う。
- ・花の形や星・月・ピースなどのマークがあって面白かった。



子どもたちの発見や感想をもとに、掲示物を作成した。(一部抜粋)



2時限目 「世界の民族衣装にふれよう」

お金に続き、次に題材に選んだのは民族衣装である。

主に東南アジア圏の民族衣装を所持していたので、子どもたちに実際にふれてもらう中で、日本の伝統的な衣装である着物・浴衣と比較しながら気付きや感想を話し合った。

各国の衣装がとても似ているという意見が出たので、世界地図を見ながらそれぞれの国の場所を確認したところ、「東南アジアの国々はそれぞれ隣り合わせであったり、近い場所に位置していたりするから衣装が似ているんだ。」と、発見する子がいた。また、日本よりも南に位置するから暑い国だということをお教えると、暑さ対策で生地が薄いのだと考える子もいた。そして、今は日常生活では民族衣装を着る機会は減り、レストランなどの店やお祝い事などの時に着るのが一般的であることを伝えると、「日本と同じなんだね。」と、子どもたちは関心をもっていた。

本学級にはフィリピンとつながりをもつ児童が在籍していたので、その児童と保護者にことわりをした上で、フィリピンの衣装を着せることにした。すると、みんなが歓声を上げて喜んだので、その児童はとても誇らしげな顔をしていたように感じた。外国につながりをもつ児童が学級に在籍することが一般的になってきた中で、その児童たちがつながりをもつ自国に誇りをもてることは大切だと考える。この授業をきっかけに、少しずつその児童の国のことにも触れていきたいと思うようになった。



衣装に触れる子どもたち



左から、タイ・ベトナム・マレーシア・フィリピン。
東南アジア圏の国では、カンボジアの衣装だけ所持していなかったため、カンボジアに行って探してくるということにした。

3時限目 「カンボジアってどんな国？」

衣装に触れる子どもたち なく世界にふれる授業を行っていたので、この時間は、私が夏休みにカンボジアに行くことを伝え、カンボジアとはどんな国なのかに焦点を当てた授業を行った。

はじめにカンボジアの所在地を地図で確認した後、人々や食べ物・世界遺産であるアンコールワット・地雷などの写真を見せ、率直な感想やイメージをあげてもらった。子どもたちの中には、これまでにカンボジアについてなんとなく聞いたことがあるという子もいれば、初めてカンボジアという国について知った子まで幅広くいた。ゆえに、こちらが与える最初の印象を偏ったものにしないようジャンルの幅を広げ、紹介したつもりだったが、やはり地雷は怖いというイメージが大きかったように思う。実際、カンボジアの友だちに自分たちのことを紹介しようとメッセージカードを書いた時には、「地雷に気をつけてください。」という内容がいくつか見られ、カンボジアへのプラスイメージをあまり浸透させられなかったことが反省として残った。

ぜひカンボジアでの現地訪問で、カンボジアの素敵なおところをたくさん見つけて、子どもたちに紹介しようという思いが強まった。

朝会での発表 「カンボジアに行ってきました！～カンボジアってどんな国？～」

カンボジア訪問後の夏休み明け、朝会で全校児童にカンボジアについて紹介する機会をいただいた。カンボジアの民族衣装を身にまとい、カンボジアの小学校の様子や衣食住文化を映像と写真で紹介した。小学校での登校風景や売店で朝食を買う様子、日本語で「きらきら星」の歌を歌ってくれた様子を見せると、子どもたちは「日本語で歌っている！」「学校でお菓子を買えるの？」と驚きでいっぱいだった。その後、クラスに戻って4時限目の授業を行った。

4時限目 「カンボジアの学校を探検しよう」

朝会で既に一度小学校の様子を映像で見たが、説明やクイズを加えながら日本の小学校と比較できるように見直すことにした。まず、子どもたちは映像を見て、カンボジアの子どもたちが制服を着ていることや売店で朝ご飯を買っていること、徒歩やバス・車などのいろいろな方法で登校している様子に興味をもった。クイズを通し、①カンボジアの小学校は学校や先生が不足しているから、午前・午後と二部制をとっている②午前の部は朝が早いから学校で朝食を買うことができる、また、午後の部は昼食後だから給食はない③学校が遠いからバスや自転車で来る子がいることを伝えると、

「給食が食べられないなんて残念だね。」「午前か午後は学校がないなんてたくさん遊べてうらやましい！」「僕たちだって1時間歩いて学校に来ているよ。バスに乗れるなんていいな。(本校は1時間かけて歩いて登校する児童が全校児童の半数いる。)」と口々に言っていた。

そこで、学校がない時間も遊べるわけじゃなく、お家の手伝いや物売りをしたり、お金持ちの子は塾に行ったりする子どももいることや近くに学校がないから学校に通えない子がいること、家の手伝いや物売りの仕事で学校に行けない子もいることを伝えると、子どもたちはとても驚いていた。「自分たちが、当たり前のように毎日学校に通い、給食を食べて勉強できるのは、カンボジアでは当たり前じゃないんだと分かった」などの意見が聞かれた。



売店で朝食を買う子どもたち



子どもたちがカンボジア渡航前に作った折り紙や塗り絵のプレゼントを手渡した写真。

「プレゼントが本当に届いて嬉しかった。」

「カンボジアの子どもたちにまたプレゼントしたいな」と嬉しそうだった。

5時限目 「学校に通えないと、どんなことが困るの？」

前時で学校に通えない子どもたちがいる話があがり、「学校に通えないと、どんなことが困るのか」という問いに、「文字を読んだり、書いたりできない」「算数の計算ができない」という意見があがったので、本時ではまず文字が読めないことを実際に体験する活動を行った。

体験活動のための状況設定：

ある村に、これまで一度も学校に通ったことがない家族が暮らしていた。ある日、母親が病気にかかってしまい、困っていると子どもも病気になってしまった。父親は15キロ離れた隣の薬屋さんに行って薬を買おうと決めた。お金は4000リエル(日本円で80円)をもち、朝からずっと歩き続け、夜中になってようやくたどり着いた時には薬屋さんには人はいなく、薬だけが並んでいた。

3本の薬があるが、買えるのは1本だけである。どの薬を選んだらよいか。
準備物：ペットボトル3本(それぞれ水入り。クメール文字で「水・薬・毒」と記載)

できるだけ実体験として、文字が読めない中で薬を選ぶ大変さ、それを飲ませることへの不安などを感じとってほしかったので、子どもたちに、母親・子ども・父親のそれぞれの役を演じてもらった。父親役の子が毒のペットボトルを選んでしまった時には、子どもたちは「文字が読めないと買いたいのものが買えなくて困る。」「せっかく買ったのに、文字が読めないことでお母さんと子どもを殺すことになっちゃう」などの声が上がった。

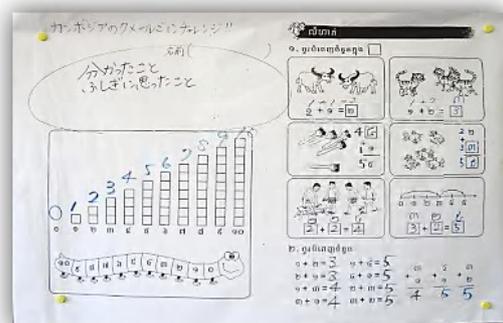
その後、クメール文字を練習して算数の問題にチャレンジしてみた。子どもたちははじめこそ「日本語の数字ならすぐできるのに…」と、慣れない様子で戸惑っていたが、

「はじめは難しかったけど、練習したら解けたよ。」「クメール文字ができるようになって嬉しい。」と、最後にはもっといろいろな問題に挑戦したいと意気込んでいた。

また、大人になっても文字が読めない人のための識字教室があることも映像で紹介した。その中には多数の子どもたちも在籍し、夜遅い時間まで机もいすもない部屋でみんなが集まって真剣に勉強していた。日本のように恵まれた環境にいと、自分の日常が当たり前になってしまうが、日本にも識字教室があることを伝えると子どもたちは驚いていた。文字が読めないと買い物で困ったり、いい仕事に就けなかったりすること。また、安全面での正しい知識を得られなかったり、ずっと貧しいままで命に関わることもあったりすることを伝えると、子どもたちからは「学校で勉強できることは当たり前じゃなく、大切なことなんだね。」と意見があがった。



ペットボトル(水・毒・薬)



クメール文字で書かれた算数の計算問題



識字教室：

テレビや自転車などが置かれた生活感が漂う部屋だったが、子どもたちはとても意欲的に学んでいた。

教師が副業で指導しているという。

6時限目 「カンボジアの子どもたちの遊びを体験しよう」

本時は体育館で3種類の遊びを紹介し、実際に遊んでみた。

- ①「セバタクローのボール」、男の子も女の子も一緒になってボールを追いかけて回して楽しんだ。
- ②「クロマーを使ったハンカチ落とし」(クロマーとは、カンボジアでよく使われているストールのようなもの)、「日本と少しルールが違うからまた違った楽しさだね!」と言いながら遊んでいた。
- ③「羽根けり」、タイによく旅行する児童が「タイにもあるよ!」と見本を見せてくれ、みんなで取り組んでみたが、なかなか難しくあまり続けられなかった。

遊び道具を教室に置いたままにしたところ、休み時間になると子どもたちは時々ふと思いついたかのようにそれらを使って遊び出す姿も見られた。そして「羽根けりが少し続けられるようになったよ」と報告に来てくれた。



クロマーハンカチ落としをしている様子

7時限目 「カンボジアの生活を覗いてみよう」

カンボジアでクメール伝統の森 IKTT という村を訪問した。代表の森本さんという方が中心となり、カンボジアの伝統シルクを養蚕して生計を立てている村である。その村で拝見させていただいた民家の暮らしと首都プノンペンの暮らしを比較しながら、カンボジアの中でも多様な暮らしがあることを提示した。

子どもたちは、カンボジアの首都では公園でエアロビを踊る人たちがいたり、大型スーパーがあったりすることに驚き、そして村での生活では、雨水を利用して食器や洗濯物を洗っている様子に、「日本も昔は洗濯板を使って洗っていたよね」と昔の日本の生活を振り返ることに繋がった。



首都プノンペンの公園でエアロビを踊る人たち



IKTT の村で洗濯をしている様子

8・9時限目 「世界の歌やダンスを楽しもう」

本学級の子どもたちは歌って踊ることが大好きである。本時は、カンボジアで昔から伝わる影絵や楽器を紹介した後、カンボジアとフィリピンの歌やダンスを実際に体験してみた。

フィリピンのダンスは、音楽の教材で学習している最中の曲だったので、フィリピンにルーツをもつ子が先生役となり、それまでの時間にステップの練習は何度かしてあった。本時では、初めて竹の棒を実際に使って踊ることに挑戦したので、「竹の棒を使うとステップが難しく跳べない」「足がぶつかってしまうよ」と苦戦しながらも楽しそうに踊っていた。

カンボジアのダンスは、ココナッツダンスとアプサラダンスというものを紹介した。映像を見せた後にゆっくり振りを教えようとしたところ、子どもたちは映像を見ている間にすでに手を動かして振りの練習をしており、興味関心をととてももってくれていたのが伝わってきた。

影絵や楽器・各ダンスは、それぞれ必ず体験できるようグループに分けて順次回すことにした。はじめは「アプサラダンスは女が踊る踊りだ」と恥ずかしがっていた男の子たちも、最後には帰り道にアプサラダンスの手の振りをしながら帰っていく様子が見られ、楽しんで踊ってくれたことが印象的であった。また、楽器は遊び道具と同じように教室に置いたままにしたところ、やはり子どもたちが休み時間になると楽器を演奏する練習に来る。それを子どもたち同士で、他のクラスの子どもたちに紹介し合ったりして広まっていくのも嬉しく思う。改めて、こちらが一生懸命準備して提示したものは、子どもたちも全身で吸収してくれることを感じた。



アプサラダンスを踊る子どもたち



ココナッツダンスを踊る様子



バンブーダンスを踊る様子

10時限目 「世界の子どもたちに目を向けよう～今の自分たちにできること～」

はじめに、世界の子どもたちとはどの子どもたちを指しているのかを尋ねた。子どもたちは「カンボジア」などいくつかの国名を答える中で、「自分たち」と答える子がいた。子どもたちに、今日は日本に住む自分たちを含めた世界の子どもたちのことを考えることを伝えると、子どもたちの顔が、前時の歌やダンスとは違うどこか真剣な表情に変わったように感じた。

授業は、3種類の世界地図を見せることから始まった。まず、通常の地図を見て、知っているいろいろな国名を上げてもらい、それを先進国と開発途上国に意図的に書き分けた。次に、「ハンガーマップ」・「宇宙から見た夜の地球地図」を見せて簡単な説明をした後、その二種類の地図から気づくことと、二つに書き分けられた国々との関係について話し合った。子どもたちからは様々な意見が飛び交った。

「世界は朝と夜の時間が反対な国があるから明るい国と暗い国がある」「日本は夜でも明るいよ」

「ハンガーマップの色は、先生が書き分けた片方の国はみんな水色で、食料が足りている」

「日本も水色だから食料には困っていないんだね」「南と北で何か違うんじゃないかな」

ここで、経済指標で分けられた先進国と開発途上国の捉え方を伝えた。一方で、ブータンのような幸福度指数という捉え方で世界の国々を捉える方法もあり、どんな物差しで世界の国のことを考えたいかを聞くと、子どもたちは「お金も必要だけど、やっぱりニコニコしていきたい。みんなが幸せな国になり

たい」と口々に言っていた。

それでも、現実に関係途上国が直面する問題は複雑であり、世界には学校に通えない子がいること、児童労働やストリートチルドレン、そして5才になる前に亡くなってしまいう子どもたちが多くいる事実を写真や映像で伝えると、子どもたちは自分たちと同じ年頃の子どもたちが向き合っている現実に驚きとショックを隠せない様子であった。今の世界は衣食住どこをとっても他国との関係を切り離せないくらい互いが深く関わり合っていて、日本はその中でも途上国からの輸入に支えられていること、世界で作られている食料の多くを先進国で分け、残りの少ない部分を関係途上国で分け合っていること。そして日本が1年間で捨てている食料の約1900万トンから半分の量の食料を途上国に与えれば、その人たちを十分に助けられることを知らせると、子どもたちは普段給食を残していることを反省していた。

授業の最後は、自分の得意なことや好きなことを生かし、現地の人々と手を取り合いながら活躍していた4名の日本の方々を紹介した。子どもたちは、世界中に広がる日本人の活躍に驚き、日本の人も世界の人の役に立っていることにとっても誇らしげだった。

そして、学習のまとめとして、「今の自分たちにできることを考えてみよう」と投げかけた。子どもたちはとても真剣に考えてくれた。「また国際理解の授業をしてね」という声がたくさん上がった。やってよかったと最後の授業を終えて、改めてこの国際理解の授業の意味・意義を再確認できた。

子どもたちの気付きや感想

- ・毎日当たり前になっていることを大切にしたい。(節電・食べ物を残さない。)
- ・みんなが幸せになるために、みんなが誰かの役に立つことをしたらよいと思う。
- ・今私にできることは感謝することだと思う。これからは感謝の気持ちを込めて何事にも頑張りたい。
- ・助け合いの気持ちが大切だと思った。
- ・今できることは、勉強。食べ物を残さない。一生懸命遊ぶ。生きる。
- ・ぼくもいつか4人の日本の方々のような、世界の人のために役立つ人になりたい。

成果と課題

「開発教育」とは何か。「貧困とは」「豊かさとは」「世界のことを子どもたちに伝えてどうしたいのか」カンボジア現地研修後は、いろいろなことをあれこれ考えすぎたせいで、なかなか実践授業に踏み込めなかった時期があった。また、職場の人に感想を聞かれても、「勉強になりました」と、ありきたりの返事しかできなかった。今思えば、きっとそれは貧困や開発についての自分の認識、知識不足を痛感し、カンボジアの国の内情や人々の思いなどをどれだけ理解できたか、それをどのように子どもたちに伝えることができるのかを不安になってしまっていたからだと思う。

これまで私は、開発教育とは子どもたちが開発途上国のことを理解し、自分たちの生活を振り返る中で、今の自分たちなりにできることを考え、実行できるような姿勢を育成することだと思っていた。しかし、今回の実践授業を通して、私は開発教育、しいては国際理解教育とは、まず他者と異文化との出会いの中で、自分と、自国を振り返ることから始まると思った。自分とは他者とは何か、そして異文化や他者に興味をもち、好きになることが、最終的には異文化や他者を認め受け入れることであることだと改めて学ぶことができた。

本学級にはフィリピンにつながりをもつ子が在籍する。今年度国際理解教育の実践を試み始めた頃から、その子も自国フィリピンを紹介したいと申し出てきた。それ以来、自主的に朝の会でタガ

ログ語やフィリピンの歌・文化などを紹介してくれるようになった。今回、8・9時限目で「世界の歌やダンスを楽しもう」の授業をしようと思ったのも、音楽の授業で「ウンパッパ」という曲を学習した際に、それがフィリピンの「ティニックリング(バンブーダンス)」と共通することを知り、その子が家でその踊りを練習してきたことから結びついた。近年外国につながりをもつ子が各校で増えてきている中で、その子たちのアイデンティティに光を当て、クラスの中で日本との架け橋になる自分の存在にどれだけ胸を張り、誇りをもたせられるか。今回の一番の成果はそこにあると思う。

国際理解教育の最後の授業として、自分たちと同じ年頃の子どもたちに焦点を当て、世界の現状について考える実践授業を行った。そこには一抹の不安があった。それは、クラスにフィリピンにつながりをもつ子がいるにも関わらず、開発途上国という定義・捉え方を伝えることが、その子の自国への誇りに影をあたえかねないか。子どもたちが哀れみの思いをもったり、「自分たちは恵まれている」などの考えに陥って終えたりしないか。子どもたちはとても素直である。素直で純粹ゆえに、教師の声かけや見せ方一つで、この世界へのイメージを180度違うものに創り上げる。幸い子どもたちからは「可哀想」という声ではなく、むしろ前向きに「今の自分には何ができるか」を考える声が多くあがったが、それもまだどこか自分事として捉えられていない感じも受けとれる。もちろんそれは2年生という子どもたちの発達段階もあるだろう。子どもを育てることは、すぐに結果をもとめるのではなく、長期的な視野であれこれ悩みながら常に模索の連続である。どのように子どもたちに声をかけ、一緒に考え続けていくか。それはこれからもずっと続く課題だと思う。そしていつか将来、子どもたちがこれからの自分の進むべき道を選択していく中で、今回感じた自分の思いを思い出してくれる日があったらと願っている。

私は、同じ一つの地球に生きる子どもたちとこれからも向き合っていきたい。カンボジアを通して、その国がもつ数々の魅力を知ること、そこにはただ「開発途上国」の一言には集約できない「人が生きている営み」があり、それが今を生きる子どもたちの「日常」なのだ分かった。この研修を通し、授業を実践していく中で、自分の中で確固たるものが分かったのも大きな成果だった。

◆参考文献

- ・「学校に行きたい！」JICA 独立行政法人 国際協力機構
- ・「どうなってるの？世界と日本～わたしたちの日常から途上国とのつながりを学ぼう～」
JICA 独立行政法人 国際協力機構
- ・ペーパークラフト 「トンレサップ湖の水上家屋」 企画 財団法人 かながわ国際交流財団